

初年次日本人大学生の小論文における 補助動詞「-てしまう」の使用傾向

辻本 桜子
TSUJIMOTO Sakurako

1. はじめに

筆者はこれまでに日本語母語話者と日本語学習者に小論文やアカデミック・ライティングを指導した経験から、両者の「-てしまう」の使用傾向には差異があると感じている。そして、日本語母語話者は「-てしまう」を多用する傾向にあると実感している。しかし、管見の限り、これまでに日本語母語話者と日本語学習者の「-てしまう」の使用傾向を比較した研究は、発話データをもとに分析された研究が中心となっている。そこで、筆者は辻本（2021）において、日本語学習者コーパス I-JAS の作文データを利用し、日本語母語話者と中国人日本語学習者の書き言葉における「-てしまう」の使用頻度と傾向について分析を行った。その結果、日本語母語話者の「-てしまう」の使用者は全体の 31.3% で、在日中国人学習者（18.8%）の約 1.7 倍であること、使用者 1 名あたりの平均使用回数も日本語母語話者は 1.7 回で、中国人学習者（1.3 回）よりも多いことが分かった。また、日本語母語話者の中には「-てしまう」を最高 5 回使用している者がいた。これらの結果により、日本語母語話者は「-てしまう」使用を好む傾向にあること、そして多用する者もいることが明らかになった。

ところで、辻本（2021）が調査対象としたのは、作文データであったが、日本語母語話者は筆者が直感したように、学術的文章（アカデミック・ライティング）においても、「-てしまう」を好んで使用している可能性がある。そこで本研究では、日本語母語話者である初年次大学生が学術的文章の書き方を学ぶ授業の課題で執筆した小論文を対象に、調査を行う。そして、小論文中の「-てしまう」の使用頻度と使用傾向を明らかにする。最後に、本研究で得られた結果をもとに、今後の学術的文章の指導時の提案を行う。

2. 調査の概要

2.1 調査の対象

調査の対象は、愛知淑徳大学の初年次大学生である日本語母語話者（以下、学生）が学術的文章の書き方を学ぶ「日本語表現 T1」（以下、「T1」）において、最初に執筆した小論文のうち 207 名分とする^(注1)。

調査対象となる小論文を提出する授業は、「T1」の第 6 回授業で、授業内容は「小論文を書くー事実と意見の区別ー<執筆>」である。調査対象の小論文は、第 6 回授業の課題として提出された小論文の草稿である。

調査の実施条件と調査対象の課題文は、以下の通りである。

- ・調査の実施条件：教室外での作成。指定の解答用紙（Word ファイル）に入力し、CampusSquare^(注2)にて提出。辞書、インターネットの使用は可能な状況。時間制限なし。監督者なし。
- ・小論文課題文：CampusSquare の特徴について、長短両側面から報告せよ。また、CampusSquare をよりよく活用するために、その短所をどのように回避・克服するか、あなたなりの工夫を説明せよ。（字数指定：500 字以上 700 字以下）

2.2 調査の内容

前節で記した調査対象の 207 名分の小論文の中から、すべての「-てしまう」を抽出し、頻度と、どの意味の「-てしまう」の使用が多いのか分析を行う。意味の分類については、守屋（1994）と一色（2011）をもとに分類した簡（2018）を参考に定めた。以下の表 1 に記す。

表 1 「-てしまう」の意味分類

1. アスペクティブの意味	
	「全部・完了」 例：太郎がカードを配ってしまうと、皆はそれを一斉に手に取った。 (一色2011,p.203)
2. 感情・評価の意味	
a. 「残念」	例：バスに忘れ物をしてしまいました。(簡2018,p.179)
b. 「非意図」	例：彼の話には、思わず笑ってしまう。 (丸山1994,p.111)
c. 「その他」(「対抗的」と「間主観」)	「対抗的」例：こうしていないで、宿題をやっ飛ばさなう。 (守屋1994,p.57)
	「間主観」例：A:誰？パソコンの電源、勝手に切ったのは。B:すみません…、私がさっき切っていました。 (一色2011,p.211)

表1に示したように、分類に際し「-てしまう」をまず、大きくアスペクトの意味^(注3)と感情・評価の意味に2分類した。

アスペクトの意味の下位分類には「全部・完了」がある。例えば「太郎がカードを配ってしまうと、皆はそれを一斉に手に取った。」(一色 2011,p.203)の文中の「-てしまう」は、すべてのカードを配った、配付が完了したという意味である。一連の動作が最後まで行われたという客観的事実を表す。

感情・評価の意味の下位分類は、「残念」「非意図」と「その他(「対抗的」「間主観」)」の3点とした。「残念」の例は、「バスに忘れ物をしてしまいました。」(簡 2018,p.179)で、これは、動作主体が意志を持って行った行為、あるいはコントロール不可能な状況で行った、あるいは行われた行為の結果を、話し手が否定的に捉えた時に使用される。文字通り、「残念」の意味である。「非意図」は、動作主体の制御が不可能な状況下で、行為が行われることを表す。無意識の行為。「つい」「予期せぬ事態」の意味を表す。例は「彼の話には、思わず笑ってしまう。」(丸山 1994,p.111)である。「その他」は次の2点を含む。1点目は「対抗的」で、動作主体の動作を完結しようという強い意志を表す表現で、例は「こうしていないで、宿題をやってしまおう。」(守屋 1994,p.57)である。2点目は「間主観」で、これは聞き手に対する「言い訳」「配慮」や「反省」を表す。例えば、「A: 誰? パソコンの電源、勝手に切ったのは。」「B: すみません…、私がさっき切ってしまいました。」(一色 2011,p.211)のように、会話文で使われることが多く、本研究が対象とする小論文での使用は少ないだろうと予想できる。そこで、この2点をまとめて「その他」に分類した。

このように、「全部・完了」「残念」「非意図」「その他」の4分類を定め、調査対象の小論文の中から、すべての「-てしまう」を抽出した後、意味分類を行った。なお、分類は、大学で2年以上の小論文またはアカデミック・ライティング指導の経験を持つ筆者を含む3名の日本語教員が行った。

3. 調査の結果

3.1 「-てしまう」の使用頻度

図1に示した通り、207名中、過半数の56% (116名)の学生が小論文の中で1回以上「-てしまう」を使用していた。未使用者は44% (91名)であった。

また、使用者の合計の使用回数は189回であり、使用者1人あたりの平均使用回数は1.6回であった。

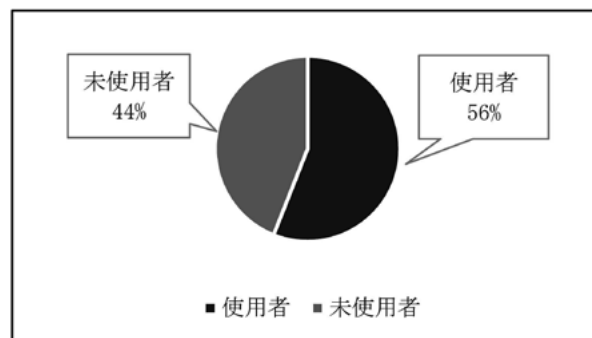


図1 「-てしまう」の使用者の割合

なお、使用者の中には、1人で5回使用している学生が2名いた。以下に、うち1名の学生の使用例を示す。

学生の使用例：

しかし、レポート管理機能では、提出した課題の取り消しができない。誤って適切でない課題を提出してしまった場合は取り消しができないため、そのまま先生に送信されてしまう。そのため、適切でない課題はそのまま、加えて訂正した課題を提出すると、先生がどちらを採点すればよいか分からず、適切でない課題の方を採点されてしまう恐れがある。

以上のように、この機能には課題の提出忘れを防ぐことができるという長所と、一度提出した課題は取り消しができないという短所がある。誤って適切でない課題を提出してしまうのを防ぐために、提出する前にしっかりと確認することが大切だ。また、万が一間違えて提出してしまった場合には、先生にメールでその旨を伝える必要がある。

当該学生の小論文は4パラグラフ^(注4)から構成されており、上例は第3、第4パラグラフに当たる。「-てしまう」は小論文の後半部分に集中的に使用されており、合計の使用回数は5回であった。

また、1文中の「-てしまう」の最高使用回数は3回で、該当者は4名いた。以下に学生の使用例を挙げる。

学生の使用例：

(しかし、CSでの履修登録は少し難しいところがある。CSには60分間の制限時間があるため、授業を選択している途中でログアウトしてしまう可能性があることだ。) どの授業を受けようか悩んでいる時に制限時間を超えてしまうと、再びログインから始まってしまうため、時間がかかってしまうのである。

上の使用例のように、「どの授業」から「のである。」までの1文中、計3回使用されていた。さらに()内に示した前文中でも「-てしまう」の使用が見て取れる。

次に、1パラグラフ中の「-てしまう」の最高使用回数について目を向けると5回で、該当者は1名であった。以下に学生の使用例を示す。

学生の使用例：

しかし、お知らせが大量に更新されるため、メールを見落としてしまうことがある。以前、アドバイザーの先生からの「クラス面談の都合の良い日を伝えてください」という趣旨のお知らせを見逃してしまい、アドバイザーの先生に伝えそびれてしまったことがある。また、Campus Squareの掲示もたくさん更新されるため、読みたかった情報が埋もれてしまう。データの更新をしなければ、未読件数が減らないので混乱を招いてしまう。

上の例では、学生は1パラグラフを4文で構成していたが、4文中すべてに「-てしまう」が使用されていた。さらに1文で2回使用されている箇所があり、パラグラフ全体では5回使用されていた。

以上のように、過半数の56%の学生が小論文で1回以上「-てしまう」を使用していたことから、「-てしまう」は学生に好まれる表現であると言える。さらに、中には1文中に3回や1パラグラフ中に5回と、多用する者もいることが分かった。

3.2 「-てしまう」の意味頻度

筆者は2.2の調査の内容で、小論文から「-てしまう」を抽出後、3名の評定者で意味を「全部・完了」「残念」「非意図」「その他」の4分類すると述べた。多くの研究調査では、文法の意味分類時に評定者の意見が一致しない場合には、一致するまで議論して決定する等がなされるが、丸山（1994）は「-てしまう」の意味は文脈・状況によって重複することがあると述べ、筆者もそれに同意する。「-てしまう」の意味は複数併用される場合がある。丸山（1994）の意味分類は3分類であり、筆者の分類より1つ少ないが、筆者の分類では、それは「全部・完了」「残念」「非意図」に相当する。以下にその3分類について、丸山（1994）が、意味が重複するものとして挙げた例を示す。

表2 「-てしまう」の意味が重複している例

例	全部完了	残念	非意図
1. 結婚式のスピーチをさせられて、あがってしまう。		○	○
2. 今月のこづかいを使ってしまう。	○	○	○

(丸山1994,p.111を参考に作成)

表2に示した「1. 結婚式のスピーチをさせられて、あがってしまう。」は、「残念」と「非意図」の2つの意味が重複する例である。「2. 今月のこづかいを使ってしまう。」は、「全部・完了」「残念」「非意図」の3つが重複する例である。本研究で扱ったデータにおいても、3名の評定者で一部、分類が一致しない用例が見られたが、一致しなかった場合は、1つの意味に決定することはせず、重複する意味を併記することにした。

以下の表3に「-てしまう」の意味頻度の結果を示す。

表3 「-てしまう」の意味頻度

全部・完了 残念	残念	残念 非意図	非意図	全部・完了 残念 その他	合計
23	92	72	1	1	189
12.2%	48.7%	38.1%	0.5%	0.5%	100%

表3に示したように、「-てしまう」の意味頻度は、「残念」単独の意味が48.7%で、次いで「残念・非意図」(38.1%)、「全部・完了・残念」(12.2%)が続いた。この3点が「-てしまう」の意味の99%を占めていた。「非意図」単独の用例は1例のみ見られたが、「全部・完了」と「その他」については単独での使用は確認されなかった。

表3の結果から、「残念」単独の使用が48.7%と、約半数を占めており、その他の結果を見ても、「残念」の意味を含む使用が多い傾向にあることが分かった。「全部・完了」は単独では使用されず、「残念」の意味を伴って使用されていることも分かった。

以下に、もっとも頻度が高かった「残念」の意味の「-てしまう」の使用例を挙げる。下線部の「-てしまう」は2箇所とも「残念」単独の意味である。

学生の使用例：

しかし、スマートフォン版ではサイドバーは表示されないという短所がある。サイドバーはスマートフォンより比較的画面が大きいPCやタブレットではない場合、画面の横幅を圧迫し、文字が小さく表示されてしまいWebサイト全体が見づらくなってしまう。

上の例を見ると、「文字が小さく表示される」「Webサイト全体が見づらい」と述べず、「表示されてしまい」「見づらくなってしまう」と、「-てしまう」を加えて表現することで、主観的な「残念」の意味を含有していることが分かる。

また、次に頻度が高かった「残念・非意図」の使用例を、以下に2点挙げる。

学生の使用例：

また、課題のところにあるのに課題提出ができないものがあると、本当に出さなくてもいいのか、単位が取れないのではないかと不安になってしまう原因にもなりうる。

学生の使用例：

例えば、office365の中に入っている teams等の課題やレポートはCS内の「レポート管理」で管理することはできない。よって、teams内の課題やレポートの提出期限を過ぎてしまったり、忘れてしまったりすることもある。

「残念・非意図」の使用例を見ても、「不安になる」「提出期限を過ぎたり、忘れたりする」と言い切らず、「不安になってしまう」「過ぎてしまったり、忘れてしまったりする」と、「-てしまう」を加えることで、主観的意味が付加されていることが分かる。

4.まとめ

本研究では、初年次大学生が執筆した小論文207名分を対象に調査を行い、その結果、過半数の56%の学生が小論文中、1回以上「-てしまう」を使用していることが明らかになった。このことから、「-てしまう」は学生に好まれる表現であると言える。

さらに、とりわけ「-てしまう」の使用を好む学生がおり、1文中に3回や1パラグラフ中に5回と、多用する者がいることも分かった。

使用された「-てしまう」の意味頻度は、「残念」単独が48.7%で、「残念・非意図」が38.1%、「全部・完了・残念」が12.2%で、この3点が99%を占めていた。つまり、学生が使用した「-てしまう」は、そのほとんどが「残念」という感情・評価を表す主観的意味を含むものであった。一方で、「全部・完了」というアスペクト的意味、客観的事実を表す意味の単独使用は見られなかった。

以上を踏まえ、今後、初年次大学生への学術的文章の書き方の指導時に留意すべき点について提案する。学術的文章を執筆する際には、感情・評価を表す主観的表現の使用は避け、客観的、論理的な記述をする必要がある。そのため、指導時には学生に学術的文章で「-てしまう」を使用する際には、主観的意味での使用を避けるように、多用はしないように注意喚起することが必要である。

注

1 2020年度の「T1」では、課題として2つのテーマで草稿と完成稿の合計4本の小論文を提出させた。のち

に4本の小論文間の「-てしまう」の使用変化も分析するため、本研究では、学生の中で4本すべての小論文を提出した者のみを対象とした。また、対象者は小論文を研究利用することについて、同意を得られた者に限っている。

- 2 CampusSquareとは、愛知淑徳大学が運営するポータルサイトのこと。学生は連絡事項や講義資料の閲覧、レポート課題提出等ができる。CSはその略称。
- 3 アスペクトとは、「動作や出来事がどの段階まで来ているかを示す文法手段。例えば「走る」という動作の始まりなのか、最中なのか、終わったところなのか、など。開始直前なら「走るころだ」、開始を示すのは「走り始める、走り出した」、進行を示すのは「走っている、走っているころだ、走り続ける」(略)完了・結果を示すのは「走ったばかりだ、走ったところだ、走ってしまった」(略)などのアスペクト表現がある」(高見澤ほか2004,p.111)。
- 4 小論文中、学生が冒頭を1マス空けて執筆している箇所を開始部とし、次の開始部までを1つのパラグラフと認定した。

参考文献

- 石黒圭 (2009) 『よくわかる文章表現の技術 I - 表現・表記編 - [新版]』 明治書院
- 一色舞子 (2011) 「日本語の補助動詞「-てしまう」の文法化: 主観化、間主観化を中心に」 『日本研究』 Vol.15, pp.201-221
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房, pp.27-61
- 鈴木智美 (1998) 「「-てしまう」の意味」 『日本語教育』 Vol.97, pp.48-59
- 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子 (2004) 高見澤孟 (監) 『新・はじめての日本語教育: 基本用語事典』 アスク出版
- 簡卉雯 (2018) 「日本語学習者の発話における「-てしまう」の使用実態: 日本語母語話者と比較」 *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, Vol.3, pp.177-187
- 辻本桜子 (2021) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者の補助動詞「-てしまう」の使用傾向 - 日本語学習者コーパス I-JAS の作文データをもとに -」 『日本語教育方法研究会誌』 Vol.27, No.1, pp.132-133
- 丸山敬介 (1994) 『日本語教育演習シリーズ②教えるためのことばの整理』 Vol.2, 凡人社
- 守屋三千代 (1994) 「「シテシマウ」の記述に関する一考察」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 Vol.6, pp.49-70